



スポーツのチカラ

大人も子どもも、みんなが楽しめるスポーツ。心身の健康維持にも欠かせません。

しかし、スポーツにはそれだけではない、知られざる「チカラ」があることをご存知ですか？

市は「石岡市スポーツ推進計画」に基づいて、スポーツに親しむことのできる環境の整備と、主体的・継続的なスポーツ活動の支援、また、地域に根付いたスポーツの振興を目指しています。

今回の特集では「石岡市スポーツ全国大会出場賞揚金制度」の利用者など、日本全国や世界という舞台上で活躍する石岡市ゆかりの皆さんへのインタビュー内容をご紹介します。

☎️スポーツ振興課 Tel 43-1111 内線 1442 (P7・8) 社会福祉課☎️Tel 23-5569 (P9)

テコンドー



第2回東アジアユース
競技大会・第12回アジ
アジュニアテコンドー
選手権大会出場



鈴木 小春さん (17)

テコンドーで世界とつながる
華奢な体から繰り出される強
烈な蹴り技。

鈴木小春さんはテコンドーの
全日本大会で優勝し、モンゴ
ル・ウランバートルで行われた
第2回東アジアユース競技大会
に出場しました。テコンドーは
朝鮮半島発祥の武道スポーツで
す。鈴木さんは5歳上の兄の影
響で、4歳からテコンドーを始
めました。現在は毎日休まず、
トレーニングやジョギング、対
面試合を含んだ練習に励んでい
ます。

「学校以外の友達ができたこ
とが嬉しかった」テコンドーを
やっていて良かったことを尋ね
ると、鈴木さんからはこのよう



▲ 4歳下の弟・嵐さんと練習する鈴木さん。気迫に満ちた表情で力強い技を次々と繰り出します。

な答えが返ってきました。
テコンドーは主に相手の腰か
ら上を攻撃します。腹部で2点、
頭部で3点を得られるため、よ
り高く蹴り技を繰り出せるよう
に練習に励んでいます。小柄な
体格で、他国の選手よりも頭一
つ分身長が低い鈴木さんですが
「フットワークやスピードなど
でフォローし、一戦でも多く勝
利したい」と話します。

「もっと多くの人にテコン
ドーの魅力を知ってほしい」
この日はレバノンで行われる
第12回アジアジュニアテコン
ドー大会を控えた練習中でした
が、鈴木さんにはこやかに話し
てくれました。



第105回
全国高等学校野球
選手権大会出場



土浦日本大学高等学校3年
伊藤 彩斗さん (18)

大切な人への感謝を胸に、闘
い切った夏

今年の甲子園（全国高等学校
野球選手権大会）で土浦日大を
ベスト4に導いたピッチャー・
伊藤彩斗さん。小学1年生のと
きに先輩に誘われ「東成井ド
リームス」に入団したのが野球
との出会いでした。「甲子園は
子どもの頃から憧れていた舞
台。出場が決まったときは嬉し
かった」と話します。格上の相
手でも攻めの姿勢を崩さない、
強気のピッチングが強みです。
伊藤さんは、野球強豪校であ
り、大学進学率も高いことから
土浦日大への進学を決めました。
土浦日大の硬式野球部には「目



▲地方大会での伊藤さん。常に三振を取るこ
とに照準を合わせ、正確なコントロール
とキレのある投球で打者を打ち取ります。

の前の3秒」という「先のこと
ばかり考えず目の前のことに集
中する」という意味の合言葉が
あります。伊藤さんは第一試合
の上田西戦、同点で迎えた8回
2アウトの場面で登板した際
にも、この合言葉を意識して投球。
見事、三球三振で抑える好リリー
フを見せました。
「野球を通して得られた精神
力で、どんなことにもポジティ
ブに取り組むことができるよう
になった」と話す伊藤さんが繰
り返し口にしたのは「感謝」と
いう言葉。「大学でも野球を続
け、いずれはプロ野球選手に
なってお世話になった人に恩返
ししたい」と今後の目標を話し
てくれました。



第16回全国小学生
ゴルフ大会出場



関 奏弥さん (11)

仲間と一緒にならどんなに辛い
場面でも頑張れる

関奏弥さんがゴルフを始めた
のは小学2年生のとき。きつ
かけはゴルフをやっていた父・
俊哉さんの影響でした。
現在、ほぼ毎日練習をしている
奏弥さん。ストレッチや素振り
はもちろん、短い距離のアプローチ
から長いショットまで練習内容
は多岐にわたります。小学5年生
の現在、ドライバーの飛距離は平
均で190ヤードあります。
実戦を重ね、最近では「ジャパン
ジュニアプレーヤーズチャンピオ
ンシップ」での3位入賞などの実
績がある関さんですが、大会では
緊張することも多いと言います。

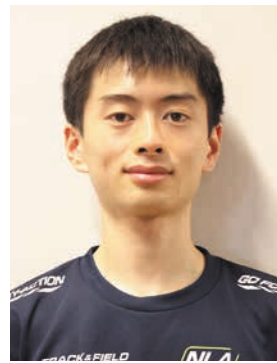


▲関さんの練習風景。ボギーをたたいたときなどに
パウンズバック（立ち直り）できるようメンタ
ル面も強化していきたいと話してくれました。

特に「試合の朝の一打目と二
打目はドキドキする」と話す関
さん。単調な練習が辛いと感じ
るときもありますが、それでも
「同じスポーツをやっている全
国の仲間と分かり合えることが
嬉しい」と話します。
関さんは、身近な先輩である
栗野泰成さん（広報石岡2022
年7月1日号でもご紹介）を目
標としており、将来はプロゴル
ファーを目指しています。
ゴルフをやっている小学生全
員が目標とする「第16回全国小
学生ゴルフ大会」に県から唯一
出場する関さんは、上位入賞を
目指して試合に臨みます。



特別全国障害者ス
ポーツ大会（燃ゆる
感動がごしま大会）
出場



松崎 雄大さん (22)

「好き」を極めたら秘めた力が
開化した

松崎雄大さんがスポーツを始めたのは中学1年生のとき。知的障害があるため市内の小学校から土浦特別支援学校中部へ進学しましたが、地域とのつながりを持たせたいという両親の願いから「恋南バドミントンスポーツ少年団」に入団しました。それまで全く運動経験がなかった松崎さんでしたが、コートに立つてみんなと一緒に競技できることを嬉しく感じました。小学校の運動会ではいつも最下位でしたが、練習に打ち込むうちに持久力が鍛えられ、陸上競技の才能を発揮し始めます。中学3年生のときには、学校の先生に勧められ出場

した「ふれあい蛭ロードレース大会（水戸市・平成28年当時）中学・高等の部で優勝しました。

2018年の「全国障害者スポーツ大会福井大会」に県代表として出場した松崎さんは翌年、阿見アスリートクラブに入団し、現在まで陸上競技を続けています。「クラブでは色々な人と競い合えることが楽しい」と話す松崎さん。陸上競技を通して世界が広がり、全国に友人がいます。

障害者スポーツの環境整備に向けては課題も多く残りますが、母・裕子さんは「たくさんの方が支えてくださったことに感謝の気持ちでいっぱい」と話します。決して弱音を吐かず、粘り強い走りを見せる松崎さん。大会では800メートルと1500メートルで「自己ベストを出し、優勝したい」と目標を話してくれました。



▲2019年の茨城国体での炬火ランナーとして開会式に臨んだ松崎さん

STT（サウンドテーブルテニス）



特別全国障害者ス
ポーツ大会（燃ゆる
感動がごしま大会）
出場



額賀 勝彦さん (65)

障がいがある人もない人も
んなつながる。それがスポーツ

額賀勝彦さんは、網膜色素変性症という難病のため、子ども頃から視覚に障がいがありました。スポーツが好きだった額賀さんは16歳のとき、陸上競技の幅跳びと短距離走で「全国身体障害者スポーツ大会」に出場しました。当時、個人競技での出場は1回限りという制限があった上に、大会後、仕事を始めたため、額賀さんはスポーツから離れていましたが、32歳のとき友人の勧めでSTT（サウンドテーブルテニス）を始めます。

STTは卓球に似たスポーツで、ピンポン球の中に金属の小さな球が4つ入っており、その

音を頼りにプレーします。

スピード感あふれるサーブを繰り出し、打球の緩急で相手のミスを誘うことを得意とする額賀さん。関東大会で8回優勝した実績を持ちますが、勝敗に対してあまりこだわりはなく「負けても悔しいとは思わない。どうやったら勝てるのかを考えて工夫するのが楽しい」と考えています。

「何でもできるから人として優秀なのではなく、できないことが多いから人として劣っているわけでもない。様々な人がいてこそ社会のバランスが保たれる」と話す額賀さん。

額賀さんは、このSTTのルールを見直した、誰でも同じルールで楽しめる「スルーネットピンポン」というバリエーションスポーツの創始者の一人でもあり、スポーツを通して多くの人たちとの交流を深めたいと願っています。



▲額賀さんが考案したラケット。卓球台と接する面積が大きくなっています。